

対話のような想起

——フツサールの記憶論の展開に関する一考察

鈴木崇志

はじめに

谷徹先生（以下、敬称略）の退職記念論集に寄稿させていただくにあたって、筆者が取組んでみたいのは、記憶／想起（Erinnerung）というテーマである。このテーマを選んだ理由は、大著『意識の自然』（一九九八）において提示された「記憶と自己移入の対比と平行関係」^①に関する谷の独創的なフツサル解釈が、筆者にとつての思索の道標でありつづけているからである。本稿では、そこから得られた着想にもとづいて、記憶／想起と自己移入（Einführung）の関係について、さらなる考察を進めてみたい。

そこでは、同書における谷の論述を概観しておこう。「フツサルと相互主観性」と題された同書第三部第六章において、谷は、フツサルが一九三三年五月にマーンケに宛てた書簡を参照している^②。それによれば、記憶が現在の自我と過去の自我との共同化であるのに対し、自己移入は自我と他我との共同化であるとされる。つまり記憶と自己移入は、「共同化（Vergemeinschaftung）」（Dok. III/3, 496）という特徴を共有するがゆえに、対比的・平行的に論じられるというわけである。そして谷は、この書簡を解釈する上で、ヘルトを援用している。ヘルトによれば、自己構成および他者構成に際しての共同には原受動的・先志向的な層があり、そこでの共同は、緩やかであるがゆえに自己との共同であるとともに他者との共同でもありうるとされる^④。谷はヘルトのこの主張を手がか

りとしつつも、自我を中心に置いていたヘルトとは異なり、当該の層で起きていることが「先自我的・没自我的な事態」^⑤であることを強調する。そして谷は、この層を「深層」と呼び、そこでの記憶が、暗黙の自我の構成に資する「中層」での記憶（第一次記憶＝把持）とも明示的な自我の構成に資する「表層」での記憶（第二次記憶＝再想起）とも異なる、いわば「第三の記憶」であると述べる^⑥。この第三の記憶は、世界の側からはたらしかけによつて原初の時間の「最低限度の広がり」が与えられるという事態である^⑦とされ、以下のようなベクトルの逆転によつて特徴づけられる。

ここ（＝第三の記憶）では、意識の志向性のほうが諸位相をとりまとめるのではなく、世界のほうが意識のまとまりを可能にするという意味で、ベクトルが逆転しているのである^⑧。

その上で谷は、この第三の記憶と同じ深層において、自己移入もまた生じていることを指摘している。谷によれば、『デカルト的省察』（一九三二）で論じられたような自己の側からの「身体の意味」と「対象の現出」の移し入れは、あくまで表層での自己移入である^⑨。これに対して深層での自己移入においては、自我未分の「癒合状態」の中で、「後に他者の身体として構成されるもの」が、「後に自己の身体として構成され

るもの」へと浸透してくるとされる^⑩。このように、深層においては、表層における自己からの移入というベクトルが自己への移入という方向に逆転する。こうした逆転によって特徴づけられるがゆえに、深層での自己移入は、深層での記憶と平行関係にあるとされるのである。

以上のような谷の解釈は、第一次記憶よりもさらに受動的な「第三の記憶」にまで遡り、自己との共同と他者との共同の平行関係を理解するための鍵をそこに見て取っているという点で示唆に富む。そしてこの解釈がフッサールの晩年のテキストの綿密な読解から得られたものである以上、それが先述のマーンケ宛書簡を理解するための最も説得的な選択肢であるということに、おそらく反論の余地はない。しかし、記憶と自己移入の平行関係をめぐるフッサールの思索の中には、原受動的・先志向的な層に向かうだけでなく、反対の方向——つまり能動的・志向的な層に——向かう傾向があったことも事実である。そこで本稿は、このフッサールの記憶／想起論のもう一つの傾向を追跡することによって、彼の記憶／想起論のもつさらなる可能性を探り出すことを目指す。あらかじめ見通しを述べておくと、第一次記憶（把持）よりも受動的な方向へと沈潜することによって「第三の記憶」が見出されるのとは対照的に、第二次記憶（再想起）よりも能動的な方向へと上昇する場合には、いわば第四次記憶とでも呼ぶべきものが見出されることになるだろう。

一 再想起のような自己移入

一・一 『内的時間意識の現象学』における把持と再想起

『内的時間意識の現象学』（一九二八）において、フッサールが、第一次記憶としての把持（Retention）と、第二次記憶としての再想起

（Wiedererinerung）の区別を行ったことはよく知られている。本節では、次節以降の議論に関連するかぎり、この基本的な区別について確認しておきたい。（なお周知のとおり、『内的時間意識の現象学』は一九〇四／〇五年冬学期講義「現象学と認識論の主要部分」の第四部「時間の現象学について」を下敷きに行っているものの、編集の過程で一九三二—一九一七年のテキストが利用されている。以下では、公刊著作としての同書の地位を重視しつつも、必要に応じて元のテキストも参照する。）

同書においてフッサールが反省の目を向けようとしているのは、時間客観が知覚されるという場面である。ここでいう特別な意味での時間客観とは、「単に時間のなかでの統一体であるだけでなく、自らのうちに時間的な広がりをも含んでいるような客観」のことである（X, 23）。「2 × 2 = 4」等の命題と異なり、聴かれる音は、ある時点で鳴り始め、一定のあいだ持続し、やがて鳴り止む。そのように時間の中で始まりと終わりをもって移ろう対象が、時間客観と呼ばれるのである。その上で同書では、この時間客観を意識の外なる世界の対象として把握するという「超越的統握」が差し止められる（X, 24）。これにより時間客観は意識に「内在的」なものとなされ、さらにその諸位相をなす「諸現象（Phänomene）」に目が向けられることになる（X, 25）。内在的時間客観の諸位相には、それについての意識の諸位相が対応している（より正確に言えば、超越的統握が差し止められている以上、両者は不可分の相関関係のうちにある）。重要なのは、意識の今の位相においては、その今における時間客観のあり方以上のものが意識されているということである。というのも、もし今における時間客観のあり方しか意識されていないとすれば、その意識位相は前後の意識位相とのつながりを欠き、結果として時間客観についての意識が成立しなくなってしまうからだ。客観が細切れにならないためには、それぞれの意識位相には、時間客観の「たった今あった（eben Gewesen）」

というあり方についての意識、すなわち「把持」が含まれていなければならぬ (X, 32)。

こうして把持は、時間客観についての意識が成立するための条件として理解される。ここからさらにフッサールは、把持が起こるメカニズムを説明している。彼の現象学の枠組みによれば、意識の志向性は、与件（知覚意識の場合には、感覚与件）が統握されることによって成立する。このとき与件と統握は、意識が客観を志向するという事態を可能ならしめる成分として、意識に実的に (reell) 内在しているとされる。しかしこの枠組みは、「今の意識 (Jetztbewusstsein)」には当てはまるが、たった今あったものについての意識としての把持には当てはまらない (ibid.)。なぜなら、例えば依然として与えられている音の感覚についての意識は、まさに今ある「残響」についての意識であって、たった今あった音についての把持ではないからだ (X, 31)。では把持に実的に含まれているのは何なのか。フッサールの見解は次のとおりである。

把持的意識が実的に含んでいるのは、音についての過去意識、すなわち第一次的な音—記憶である。それを、〈感覚される音〉と〈記憶としての統握〉へと分解することはできない。(X, 32)

フッサールは、感覚与件と統握が実的に内在している今の意識を「原印象」あるいは「印象的意識」と呼ぶ (X, 36)。これに対して、上の引用で述べられているように、把持（＝把持的意識）には新たな感覚与件が含まれていない。むしろそれは、起源としての原印象（＝印象的意識）からの変様、すなわち「把持的変様 (retentionale Modifikation)」であるとされる (ibid.)。つまり把持は、時間客観の一位相の存在様態を〈今ある〉から〈たった今あった〉へと変化させるのである。

対話のような想起

この把持的変様の特徴を、二点指摘しておこう。第一は、把持それ自身は感覚与件に対する新たな統握ではなく、むしろ原印象における感覚与件と統握を保存するはたらきであるという点である。そのかぎりにおいて、把持的変様は「過去の遺産を自らのうちに担っている」(X, 29-30)。第二は、時間客観が連続的なものとして意識される以上、その意識を可能ならしめている把持的変様も、やはり一定の区間において「連続的 (kontinuierlich)」であって「絶え間がない (stetig)」という点である (X, 30)。

ところでフッサールは、こうした第一次記憶としての把持に加えて、第二次記憶としての再想起についても論じている。先述のように、把持は、時間客観についての知覚を成り立たせるものであった。これに対して再想起は、時間客観についての知覚の「再生 (Reproduktion)」である (X, 40)。そして、知覚が時間客観を現在のなものとして意識するはたらき、すなわち「現在化 (Gegenwärtigung)」であるのに対し、再想起は、現在のものとして知覚において構成されたものを再現するという意味で「準現在化 (Vergegenwärtigung)」なのである (X, 38, 42)。

また同書によれば、知覚が感覚を与件としているのに対し、再想起は「ファンタスマ」を与件としている (X, 46)。それゆえ、再想起は「空想 (Phantasie)」の一種であるとされる (X, 44)。ただし再想起は、知覚の再生であるという点において、その他の恣意的な空想から区別される。特筆すべきは、そのようにして再想起がかつての知覚と重なり合っているということが、過去についての真なる言明が可能になるための条件であるということである。つまり、再想起がかつての知覚と「同一化する合致 (identifizierende Deckung)」¹³⁾ (X, 48) の関係にあるという想定のもとでは、時間客観の知覚において明証的であった系列（例えばメロディーの順序）が完全に再現され、過去についての言明（例えば「かつて、しかしかの

順序でメロデーが知覚された」が真となる。そして時間客観の知覚は把持によって可能になるのだから、再想起は把持に基づけられている。それゆえにこそ、把持が第一次的で、再想起が第二次的だというわけである。

一・二 「現象学の根本問題」講義における記憶と自己移入のアナロジー

把持と再想起の二層構造による『内的時間意識の現象学』の記憶／想起論は、時間客観についての意識、および過去についての言明を正当化するという点に関しては、完成度の高い理論だと言えよう。だがフッサールは、それが形成された一九〇五年から一九一〇年代にかけて、同時に自己移入論をも構想しつつあった。記憶／想起論への懸念が生じるのは、それがこの自己移入論のモデルとして使用される場面においてである。フッサールが初めて問主観性の問題を体系的に論じたのは、一九一〇／一一年の「現象学の根本問題」講義においてである。そこでは、他の意識流の存在を知るための経験が「自己移入」として説明され、その現象学的分析が行われている。そして、すでにテンゲイが指摘しているように、この講義における自己移入論は、同時期の記憶／想起論と密接な関連のうちにある。

同講義においてフッサールは、自己移入が像意識の一種ではないことを強調している。仮に自己移入が起こる時点での私の体験が他者の体験の像として機能しているのだとすれば、当該の時点での私の体験は、他者の体験と似ているはずである。しかし、実際の自己移入においてはそのようなになっていない。

私が君に怒りを移入する (einfühlen) と、私は自分では怒っていない。

ない。そう、少しも怒っていないのである。それはちょうど、私が怒りを空想したりそれについて単に想起したりするときに私が怒っていないのと同様である。(XIII, 188)

こうして、自己移入が像意識ではないということは、空想あるいはその一種としての再想起を引き合いに出しつつ説明される。そしてさらに、自己移入と再想起は、像意識に属していないという消極的な特徴のみならず、「準現在化」であるという積極的な特徴をも共有しているとされる (ibid.)。

テンゲイはこのフッサールの主張のうちに、「自己移入と記憶の平行関係」^④をめぐる思考の萌芽を見て取っている。冒頭で紹介したように、「平行関係」(Dok. III, 496) という語が晩年のマーンケ宛書簡において実際に使われている——ただしここでは「平行関係」のみならず「対比 (Konfrontation)」への言及もなされていたのだが——を考慮すると、テンゲイのこの見解は重要である。

なおテンゲイ自身は、この平行関係に疑義を呈している。その理由は、自己移入と記憶のそれぞれにおいてなされている変様の違いにある。たしかに、記憶と同じように、自己移入においてもある種の変様がなされている。しかしそれは、「自分自身の意識流」から「他我」への「意味の変様」である。^⑤これに対して記憶における変様は、第一次記憶としての把持における「連続的変様」^⑥を基盤としている。本稿の「一」でも見たように、再想起はこの連続的変様によって成立した知覚との〈同一化する合致〉である以上、基盤となっている連続的変様を忠実になぞることになる。そのように記憶のはたらきを一貫して連続的なものと解するならば、それは自己移入のはたらきとは相容れないだろう。なぜなら、もし自己移入が「他者の本来的な異他性」^⑦についての経験であるとすれば、

そこにおける変様は、連続的ではなく非連続的であるはずだからだ。以上のような解釈のもとで、テンゲイは、「現象学の根本問題」講義における自己移入と記憶の平行関係あるいは類比についての議論の行く末に悲観的な見通しを与えている。

「…」自己移入と記憶の類比の破綻とともに、他者における打ち消すことのできない否定的なもの——つまり本来的に異他的なもの——を、準現在化という概念を介して「連続的変様」と結びつけようとする試みもまた失敗する。この失敗は、決して偶然に起こるわけではない。¹⁸⁾

このテンゲイの指摘から、私たちは一つの方針を得ることができる。それはすなわち、連続性によって特徴づけられる第二次記憶(再想起)を、非連続性によって特徴づけられる自己移入と類比的に語ることはできないということだ。¹⁹⁾ 言い換えれば、再想起のような自己移入について、語るうとする試みは必然的に失敗するということである。

このことを踏まえると、本稿の冒頭で紹介した谷の「第三の記憶」概念の重要性を再確認することができる。つまりそれは、再想起の基盤となっている把持を、さらにもう一段掘り下げることによって、「深層」レベルで自己移入と記憶の平行関係と対比を説得的に論じていたのである。これは、「現象学の根本問題」講義の時点でのフッサールの議論の難点を、晩年のフッサールの思想によって、いわば内在的に乗り越えようとする試みであったと解釈することができる。

他方で本稿は、こうした内在的な乗り越えが、逆方向においても——つまり、再想起よりも自発的なレベルでの想起を指摘することによって——可能であることを次節以降で示していきたい。これは、ほかなら

ぬテンゲイが、フッサールの晩年の草稿における「生の歴史(Lebensgeschichte)」という概念に着目することによって示していた方向でもあった。そして『生の歴史/物語という混種概念』(一九九八)においてテンゲイが行ったのは、この概念をメルロ＝ポンティやリクールの思想を介して豊かにすることであった。これに対して本稿は、テンゲイの研究に範をとりつつも、専らフッサールの思想の内部で「生の歴史」概念の形成過程を説明することを試みる。²⁰⁾

二 記憶への自己移入

前節の初めに述べたように、『内的時間意識の現象学』の原型となったのは一九〇四/〇五年冬学期講義「現象学と認識論の主要部分」の第四部であった。そして、それから間もない一九〇五年夏学期に、フッサールは「判断論」と題した講義を行っている。現在では『フッセリアーナ資料集』第V巻として出版されているその講義録の中には、『論理学研究』第一版(一九〇〇/〇一、以下『論研』)や一九〇二/〇三年冬学期の「論理学」講義、および同学期の「一般認識論」講義と重なる部分も多い²¹⁾。しかしこの講義で新たに論じられた事柄もいくつかあり、これから紹介する「自己移入」概念の判断論への適用もその一つである。²²⁾

フッサールが一九〇五年頃からリップスから「自己移入」という語を借用して使い始めたことはよく知られている。しかし同年の「判断論」講義において、リップスとは全く別の「自己移入」概念が登場していることは、現在でも十分に知られているとはいえない。『フッセリアーナ』第VIII巻の編者のケルンはこの用法とマイノングの *Über Annahmen* (1902) との関連を指摘しているが、『フッセリアーナ資料集』第V巻の編者のエリザベト・シューマンは、むしろそれが「判断論」講義に出席していたダウ

ベルトに由来するとして、ケルンに反論している²⁴。いずれにせよ、この用法がリップス由来の用法とは別の特殊なものであることは事実である。

同講義において「自己移入」という語が登場するのは、『論研』以来の「判断」と「表象」の関係をめぐる議論においてである (Mat. V, 135f.)。ここでフッサールは、『論研』のときと同様に、「表象が判断を基づけている」というブレントノの説を退けた上で、客観化作用（そこにおいて何らかの客観との志向的關係が成立する作用）という点で両者は同等であると述べる。つまり表象と判断は「同一の意味内容」(Mat. V, 136) をもちうるが、だからと言ってどちらか一方が他方を基づけているわけではないのである。『論研』では、「両者の違いは客観の存在を措定するか否かであった (vgl. XIX2, 500)。これに対して同講義においては、表象と判断の關係のみならず、願望や疑問をも視野に入れて、より一般的な説明が試みられている。それによれば、表象とは、私たちが判断作用のうちに身を置きつつも (uns hinein fühlen)、自分では判断を下さないときに成立する。同様に、願望作用のうちに身を置きつつも自分では願望しないことや、疑問作用のうちに身を置きつつも自分では疑問を抱かないことも可能であるというわけである。自己移入 (Einfühlung) という語は、ここでは、そのようなある作用のうちに身を置きつつも、自分ではその作用を遂行しないこと」という意味で用いられている。フッサール自身も認めているように、このとき、特に「感情 (Gefühl)」が問題になっているわけではない (Mat. V, 136)。

むしろ私たちは「身を置いて思考する」(Sich-Hineindenken) や「空想によつて身を置か入れる」(Sich-Hineinphantasieren) と「言つてもよい」。(Ibid.)

とはいえフッサールは、ここではひとまず *Einfühlung* という語を採用している。こうして、あらゆる作用に及ぼしうる先述の変様が、「自己移入の変様 (Einfühlungsmodifikation)」と名づけられることになる。

したがって、単なる表象は判断の自己移入の変様である。同じように、単なる空想表象は知覚への自己移入である〔…〕。同じように、過去についての単なる表象は、それが直観的表象と解される場合には、記憶への自己移入 (*Einfühlung in die Erinnerung*) にほかならない、等々。(Mat. V, 137)

目下の意味での自己移入の対象が、他者である必要はない。私は、過去の私の判断に対して、その判断のうちに身を置きつつ、今ではその判断を下さないことがある。引用文中で「記憶への自己移入」と呼ばれているのは、そのような過去の判断の自己移入の変様であると考えられる。記憶への自己移入は、前節で見たような再想起とは異なり、過去と同一化するわけではない。たしかにそれは、過去の知覚（及び、それに依拠して下された判断）の再現であるという意味では「直観的」である。しかしそれは、過去の判断における存在措定をやはり行っていないという点で、すでに過去から逸脱している。同様に、過去の願望や疑問についても、この意味での自己移入が可能だろう。かつては固く信じていた、かつては強く望んでいた、かつては不思議でたまらなかった——こうした作用は、生き生きと再現されつつも、もはや今の私には共有されることがある。その場合には記憶への自己移入が起こり、過去の私が、あたかも他者であるかのように遇されるのである。

ケルンは、自己移入という語がこうした特殊な意味で用いられるのは、一九〇五年の「判断論」講義においてのみであると述べている²⁵。たしか

に以降のフッサールは、自己移入という語を、主として身体を介した感覚や感情の移入を表すために用いるようになる。だが、彼が一九〇五年に表明した発想そのものを放棄したわけではない。すでに見たように、同講義での「自己移入」は「空想によって身を置き入れること (Sich-Hineinphantasieren)」とも言い換えられていた。そしてこの語は、後のテクストにおいてもしばしば登場し、空想・像意識・他者経験などのさまざまな場面での作用への自己移入を表すために用いられている。

ただし本稿ではそれらの場面には立ち入らず、専ら現実の自分の作用との関連で、この語の用例に注目したい。とりわけ以下で取り上げてみたいのは、一九一〇年に書かれた草稿での論述である。そこにおいてフッサールは、命令文においては「私」と「君」が不可欠であり、「伝達的なもの (das Kommunikative)」が文の内容に含まれているはずだと主張している (XX/2, S. 247)。その上で彼は、自分に命令を向けるという状況に目を転じる。

したがって「孤独な」思考において私が「間抜けなやつめ (Du bist ein Esel)」と言うのは、私が空想によって彼との対話の場面へと身を置き入れ (mich in ein Zwiegespräch mit ihm hineinphantasieren)、そして彼との空想的な話し合い (Phantasiegespräch) において、なるべく好意的に「間抜けなやつめ」と言いながら、同時に、彼は間抜けなやつだと実際に判断するときだけである。(Ibid.)

ここで「間抜けなやつめ」という発言が例に挙げられたのは、それが「もっとしっかりしろ」という命令を暗に含んでいるからだろう。『論研』での「失敗したのだから、もうこれ以上続けられないぞ」(XIX/1, 43) という独白の例と同様に、自分の不出来を指摘する表現が選ばれているの

は、フッサールの性格によるものかもしれない。それはさておき、『論研』が同様の発言をあくまで独白と見なしていたのに対し、ここでは、自分自身との空想的な対話の可能性が論じられている。そしてそれを可能にするものこそが、一九〇五年の講義で言及されていた「空想によって身を置き入れる」というはたらきなのである。このはたらきによって、一方の側には、実際に「彼は間抜けなやつだ」と判断する者が登場する。他方の側には、その判断を聞き入れることが期待されている「彼」が登場する。この者が「私」ではなく「彼」と呼ばれているのは、おそらく、この者が発言の主体としての「私」と同じ判断を、さしあたりは共有していない (つまり、自分のことを間抜けだと思っていない) からである。そしてこのような食い違いは、空想的な対話が始まるための条件であるとされる。もし初めから意見が一致しているならば、自分で自分に命令する必要もないからだ。目下の例における私は、批判的判断を下すもう一人の「私」の側へと自己移入によって身を置き入れている。そして私は、そちらの視点から、「彼」と化した自分を見つめ直すのである。

三 対話のような想起

前節で確認されたのは、一九〇五年の「判断論」講義で論じられた独自の意味での「自己移入 (= 空想による身の置き入れ)」が一九一〇年の草稿に受け継がれ、自己との対話を可能にするという役割を与えられているということである。しかし一九一〇年の草稿においては、過去の自己との対話が話題になることは特にならない。ここでは、一九〇五年の段階では存在していた記憶／想起論とのつながりが、かえって薄れていると言える。管見のかぎり、「記憶 (想起)」と「対話」が明示的に結びつけられるのは、それから20年以上が経った一九三一年一月二〇日の草稿 (XV,

「Text Nr. 24)においてである。「他者との共同体と平行的なものとしての、私自身との人格的(自我的)共同体」と題されたこの草稿の冒頭において、フッサールは、一九一〇年の草稿で論じられていた「対話(Zwiesgespräch)」の問題に、ふたたび立ち入っている。

私は私との対話のうちに、つまり私との弁証的な話し合いのうちにある。私は過去の態度決定、かつて私によって構想された理論、そしてその理論のうちに秘められた動機へと沈潜する。そうすることで私は、今や現在の私として批判を行いつつ、自分のかつての先入見を明らかにして、それを拒む。(XV, 416)

私との対話の例として挙げられるのは、まずもって過去の先入見(Vorurteil)の是正である。ただしフッサールは、かつての判断のみならず「かつての生」の全体が「自己省察」や「自己批判」の対象となると付け加えている(ibid.)。同じで彼が念頭に置いているのは、おそらく、かつての心情や願望や行為から距離をとることだろう。いずれにせよ目下の草稿では、対話の相手が過去の私であるというケースに焦点が当てられている。

するとこのとき、記憶／想起と自己移入の平行関係を、新たな視座のもとで描き出すことができるようになる。興味深いのは、本稿の冒頭で紹介した一九三三年のマーンケ宛書簡と同じ「共同体(Gemeinschaft)」という語が、これら二種の作用を関係づけているということだ。

さて、他者との共同体との平行関係について考えてみよう。自己移入において——つまり他者を根源的に理解し、他者を共に現在のうちにある人格としてもつことにおいて——私は君と、つまり他の私

と接触することによって、他者とともにある。それはちょうど、私が想起の隔たりのもとで過去の私と接触している、すなわち過去の私との意識の共同体のうちにあるのと同様である。(Ibid.)

ここでフッサールは、一九一〇／一一年の「現象学の根本問題」講義のときと同じように、再想起との類比で自己移入を説明するという陥穽に陥っているのだろうか？ 答えは否である。なぜなら一つ前の引用で確認したように、ここでは過去との〈同一化する合致〉によって特徴づけられるような再想起ではなく、むしろ過去との対立による自己吟味が主題となっているからだ。直前の引用では、そのことが「想起の隔たり(Erinnerungsdistanz)」という言葉で表されている。過去の私は、単に現在の私と時間的に隔たっているだけでなく、態度に関しても隔たっている。そのように距離をとる想起は、他者との対話や自己移入に喩えられている。このとき現在の私は過去の私をあたかも他者であるかのように見つめるのであつて、仮にそこで過去の私との「接触(Fühlung)」が生じるのだとしても、それは、自己移入(Einführung)における他者との接触と同程度でしかない。本稿の解釈では、ここでフッサールは、他者経験を記憶／想起に喩えているのではなく、むしろ記憶／想起を他者経験に喩えている。要するに、再想起のような自己移入ではなく、対話のような想起について語っているのである。

そのように解釈すると、同草稿がフッサールの記憶／想起論において有する意義が見えてくる。ここでフッサールが論じているような「隔たり」を生じさせる想起は、『内的時間意識の現象学』に登場した再想起と同じものではない。本稿の一・二で説明したとおり、そこでの再想起は、把持の連続的変様によって成立した知覚と同一化した合致する作用、すなわち過去の再生であった。他方でここでの想起は、対話者の視点か

ら過去と向き合うことによって連続性や同一性に切れ目を入れる作用、すなわち過去の自己への批判的反省である。本稿ではこれを、第一次記憶（把持）とも第二次記憶（再想起）とも、そして谷が指摘した「第三の記憶」とも異なる、第四の記憶と呼ぶことにしたい。

もしかすると、それを記憶と呼ぶことには語弊があるかもしれない。なぜなら当該の想起によってなされるのは、単なる過去の保存ではなく、場合によってはそれを是正し、それに新たな意味を与えるという営みだからだ。しかしフッサール自身が、そのような営みを *Erinnerung* という言葉で表そうとしていることは事実である。それが恣意的な空想ではなくあくまで記憶／想起の枠内に収まるのは、把持と再想起によって保存されてきた過去がその下地となっているからである。

では、なぜ下地にとどまるだけでは不十分なのだろうか。その理由は、フッサールによれば、下地となる過去がそれ自体で完成した織物とは言えないからである。むしろそれは「間隙を含んでいたり」(Lückenhaft)、あるいはその他の仕方では不完全であったりする」(XV, 418)。私の把持と再想起の産物としての「生の記憶 (Lebenserinnerung)」は、そのいくつかの段階が際立っているだけの、『曖昧な』統一体にすぎないのである (*ibid.*)。この事実を踏まえると、第四の記憶／想起は、私の記憶の間隙を埋めて、より明確な統一体を作るといふ役割をもつと言える。そしてそれによって作られるものは、同草稿では、生の記憶を下地とした「生の歴史 (Lebensgeschichte)」と呼ばれてくる (XV, 419)。

フッサールは、そのようにして生の歴史を編み上げる作業を、他者の行為を見たときに子供が発する「どうして (Warum)？」という問いへの応答になぞらえている (XV, 420)。そのように問われた大人は、自分の行為の目的や、使っている道具の用途を教えることによって答えようとする。それと同じように、現在の私は、過去の自分の目的やそのために

採られた手段を吟味するために、過去の私に「どうして？」と問いかける。もし仮に、私が完全な再想起の能力をもち、生まれてから今に至るまでの生を余すところなく再生することができたとしても、それだけで生の歴史が出来上がるわけではない。ただ生きているときには自覚されていないかった目的を確かめ、その妥当性を吟味することによって、私の生は徐々に明確な統一性をもつようになるのである³⁴⁾。

ただしフッサール自身が認めているように、そのような明確な統一がなくても私たちは生きることが出来る。空間的な道を歩む際には、その目的は、途中の「美しい景色」であれ、「終点」に辿り着くことであれ、あらかじめ意識されている (XV, 419)。しかし「生の道程」は、決してあらかじめ「目的論的な統一」をもつことがない (*ibid.*)。はっきりした目標などなくても、とにかく生は進行してゆくのである。

しかし、それだけで満足してよいのだろうか。上で述べたような仕方では「過去の自己との対話としての想起によって」、私と、それから（仲間としての）各人に対して「生の道」が、私の生の時間が、私の「生の歴史」が構成されること——このことは、所与の世界が所与の人間的世界（人間とその仲間の世界）として構成されることの要点ではないだろうか。そしてそれは、おそらく、「人間と」動物との根本的な違いではないだろうか。 (*Ibid.*)

過去の私の目的を吟味することによって生の歴史を作ってゆくことの意味は、それによって、「仲間 (Mitmenschen)」からの「どうして？」という問いに答えられるようになるという点にある。そうした問いへの答えが用意されることによって、この世界は文化や歴史を備えた「人間的世界」となるのである。仲間たちの行為が何のためになされ、身の回りの

道具が何のためにあるのかを知る術がなければ、人々は文化や歴史を共有することができないからだ。それゆえ同草稿の末尾で述べられているように、目的を尋ねる「どうして?」という言葉は、「原歴史 (Urgeschichte)」を学ぶための問いかけなのである (XV, 420)。

以上を踏まえると、自己との共同体 (生の歴史) と他者との文化的・歴史的共同体は、単に平行関係にあるだけでなく、前者の形成が後者の形成を可能にしているという意味で影響関係にあると言える。したがって、上の引用で述べられているように、私の生の歴史が「私」に対して構成されることは、それが「各人」に対して構成されることをも含意している。するとこの *Lebensgeschichte* という言葉には、ドイツ語の *Geschichte* という言葉の二義性を読み込むことができる。対話のような想起によって形成された私の「生の歴史」は、同時に、実際の対話の場面で他者に語り出すことのできる私の「生の物語」なのである。

結び

冒頭で述べたとおり、本稿の目的は、フッサールの記憶／想起論が原受動的な方向だけではなく能動的な方向にも展開されていた経緯を辿ること、そのさらなる可能性を示すことであつた。そのために、まず一・一においては、『内的時間意識の現象学』における彼の記憶／想起論の原型が提示された。次に一・二では、そこで登場した「再想起」に自己移入をなぞらせること、つまり「再想起のような自己移入」について語ることに伴う難点が、先行研究にならって指摘された。そこで第二節では、別の仕方で記憶／想起と他者経験の平行関係について語る方法を探るために、一九〇五年の「判断論」講義が参照された。それにより明らかにしたのは、そこで言及されていた「記憶への自己移入」が、後年

の、自己との「対話」に関する思想へと受け継がれたということであつた。その上で第三節では、特に過去の自己との対話について論じた一九三一年の草稿の読解を行った。そこにおいてフッサールは、「対話」に想起をなぞらせる——つまり「対話のような想起」について語る——という仕方、記憶／想起と他者経験の平行関係を説明している。その場合には、他者が自己と連続的なものと捉えられるのではなく、むしろ自己のうちに隔たりが生じることが明らかになる。そして、そのようなして過去の自分と距離を置いて自分の生を検討することは、「生の歴史」が形成されることの、ひいては人間的世界が構成されることと条件である。第四の記憶としての「対話のような想起」を含むようにフッサールの記憶／想起論が展開されたことによつて、このように、新たな仕方、で記憶／想起と他者経験の平行関係を捉えることが可能になるのである。

凡例

フッサールからの引用は、*Husserliana* の巻数をローマ数字、頁数をアラビア数字で表す。また、*Materialien* と *Dokumente* からの引用に際しては、巻数の前にそれぞれ *Mat.* と *Dok.* という略号を付す。

注

- ① 谷一九九八、六一五頁
- ② *Hua. Dok. Bd. III/3, S. 491-9.* なお、この書簡においてフッサールは「私」と私との、つまり流れつつある今の私と過ぎ去つたすべての私との『共同体』に言及し、それを私と他者との共同体と対比している (S. 496)。この文言については、本稿の第三節でふたたび検討する。
- ③ 谷一九九八、六一三—四頁

- ④ Vgl. Held 1966, S. 164-172/邦訳二二六―二三八頁
- ⑤ 谷一九九八、六一六頁
- ⑥ 同上、六一七頁
- ⑦ 同上、六一七―八頁
- ⑧ 同上、六一八頁
- ⑨ 同上、六二二―四頁
- ⑩ 同上、六二七頁
- ⑪ これに対応する文章は一九〇七―〇九年の時期に書かれたと推測される草稿 (*Hua*, Bd. X, Text. Nr. 49) の中 (X, 312) に見出される。なおこの草稿の執筆時期の推定根拠については、『フッセリアーナ』X巻の補足テクストの抜粋版の編者ヘルネットの序文を参照 (Husserl 1985, S. XXXIII-XLIV)。
- ⑫ これに対応する文章は *Hua*, Bd. X, Text. Nr. 50 の中 (X, 327) に見出される。なおヘルネットはこの草稿の執筆時期を一九〇九年九月―一一年末と推定している (Husserl 1985, S. XLV-LIII)。
- ⑬ これに対応する語句は *Hua*, Bd. X, Text. Nr. 53 の中 (X, 368) に見出される。なお前註で挙げた草稿と同様、ヘルネットはこの草稿の執筆時期も一九〇九年九月―一一年末と推定している。
- ⑭ Tengelyi 1998, S. 68
- ⑮ *Ibid.*, S. 70
- ⑯ *Ibid.*, S. 71
- ⑰ *Ibid.*, S. 72
- ⑱ *Ibid.*, S. 73
- ⑲ 同様の指摘は Römpp によってもなされる (Vgl. Römpp 1989, S. 153)。
- ⑳ もちろん、だからといってテンゲイがフッサールの思想そのものの展開を無視しているわけではない。彼は、時間論との関連においては、ヘルナウ草稿で生じた「原印象と内的時間意識の志向性の関係」の変化を追跡している (Tengelyi, 2008, p. 36)。
- ㉑ 『論研』および一九〇二―〇三年の講義録との対応関係については、Schuhmann, E., „Einleitung der Herausgeberin“, in *Hua. Mat.* Bd. V, S. IX を参照。
- ㉒ なお、この『フッセリアーナ資料集』第V巻の内容は、二〇一九年三月のフッサール研究会の特別企画「フッサールの新資料を読む(8)」において植村玄輝氏(岡山大学)によって報告された。本節での「自己移入」の解釈は、この植村氏の報告、および当日の研究会で交わされた議論に多くを負っている。
- ㉓ Kern, I., „Einleitung des Herausgebers“, in *Hua*, Bd. XIII, S. XXVII
- ㉔ Schuhmann, E., „Einleitung der Herausgeberin“, in *Hua. Mat.* Bd. V, S. X-XI
- ㉕ Kern, I., „Einleitung des Herausgebers“, in *Hua*, Bd. XIII, S. XXVII
- ㉖ Vgl. *Hua*, Bd. XIII, S. 298, 303. なお、この挙げた草稿 (*Hua*, Bd. XIII, Text Nr. 10) に対しては、リシールが集中的な読解を施している (Richir 2000, pp. 134-150)。この草稿とリシールの思想の関連については、勝田岬氏(立命館大学)から学んだ。
- ㉗ Vgl. *Hua*, Bd. XXIII, S. 467
- ㉘ Vgl. *Hua*, Bd. XIV, S. 18, 484; Bd. XV, 250
- ㉙ 例えば一九一七年に書かれた草稿においては、一九〇五年の「記憶への自己移入 (Einführung in die Erinnerung)」に対応する *„Sich-hineinphantasieren in eine Erinnerung“* (XXV, 170) とする言及回しが見出される。また、一九二二―二四年に書かれた草稿においては、「古き自我」との「不一致」が生じる場面での *Hineinphantasieren* が論じられる (XXIII, 582)。
- ㉚ *Hua*, Bd. XXV2, Text Nr. 16
- ㉛ この「自己省察」と訳した単語は *„Selbstbesinnung“* である。なお谷は「省察 (Besinnung)」を「生の方向を(そのつと新たに)見いだす人間の哲学的思考作用」として説明し、それが「現象学そのものの自己規定」でもあると指摘している (谷二〇一九、八四頁)。
- ㉜ ヘルトも『生き生きした現在』の中で、この箇所を引用している (Held 1966, S. 166/邦訳二二九―三三〇頁)。ただし彼はこれを「原受動的で先反省的な」層 (*ibid.*, S. 165/邦訳二二八頁) での平行関係の例として扱っている。本稿は、これをむしろ能動的な層での自己省察として読むところから、ヘルトと解釈を異にする。
- ㉝ 「間隙」という語との関連では、C草稿群に属する一九三〇年の草稿での

記述を参照するところがある。それでは、想起にまつて与えられる直観的対象が、過去のものを知るための手がかりとして、言い換えれば「埋め合わせ (Lückenbüßer)」として用いられると推定された (Mat. VIII, 92)。

③4 より厳密に言えば、『社会的世界の意味構成』(一九三二)の中でのコメントが行ったように、行為の動機に関する「ために (Um-zu)」と「(Weil)」を区別すべきだとする (vgl. Schütz 2004, § 8 17-18)。

文献

- Meinong, Alexius, 1977, *Über Annahmen*, hrsg. von R. Haller und R. Kindinger, Graz: Akademische Druck u. Verlagsanstalt.
- Held, Klaus, 1966, *Lebendige Gegenwart*, Den Haag: M. Nijhoff (新田義弘ほか訳 一九九七『生の生としての現在「新装版」』北平出版)。
- Husserl, Edmund, 1966, *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins (1893-1917)* (Husserliana Bd. X), hrsg. von R. Boehm, Den Haag: M. Nijhoff (谷徹訳 二〇一六『内的時間意識の現象学』ちくま学芸文庫)。
- 1973, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Erster Teil* (Husserliana Bd. XIII), hrsg. von I. Kern, Den Haag: M. Nijhoff.
- 1973, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Zweiter Teil* (Husserliana Bd. XIV), hrsg. von I. Kern, Den Haag: M. Nijhoff.
- 1973, *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität, Dritter Teil* (Husserliana Bd. XV), hrsg. von I. Kern, Den Haag: M. Nijhoff.
- 1980, *Phantasie, Bildbewußtsein, Erinnerung* (Husserliana Bd. XXIII), hrsg. von E. Marbach, Den Haag: M. Nijhoff.
- 1984, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Erster Teil* (Husserliana Bd. XIX/1), hrsg. von U. Panzer, Den Haag: M. Nijhoff (谷松弘孝ほか訳 一六七〇・一六七五『論理学研究②』・『論理学研究③』みすず書房)。
- 1984, *Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Zweiter Teil* (Husserliana Bd. XIX/2), hrsg. von U. Panzer, Den Haag: M. Nijhoff (谷松弘孝訳 一九七六『論理学研究④』みすず書房)。

——1985, *Texte zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893-1917)*, hrsg. von R. Bernet, Hamburg: Felix Meiner Verlag.

——1987, *Aufsätze und Vorträge (1911-1920)* (Husserliana Bd. XXV), hrsg. von H. R. Sepp und T. Nenon, Den Haag: M. Nijhoff.

——1994, *Briefwechsel III: Die Göttinger Schule* (Husserliana Dokumente Bd. III/3), hrsg. von K. Schuhmann und E. Schuhmann, Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers.

——1995, *Cartesianische Meditationen*, hrsg. von E. Ströker, 3. Auflage, Hamburg: Felix Meiner Verlag (浜島辰二訳 二〇〇一『カントの洞察』岩波文庫)。

——2005, *Logische Untersuchungen Ergänzungsband, Zweiter Teil* (Husserliana Bd. XX/2), hrsg. von U. Melle, Dordrecht: Springer.

——2006, *Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934): Die C-Manuskripte* (Husserliana Materialien Bd. VIII), hrsg. von D. Lohmar, Dordrecht: Springer.

Richir, Marc, 2000, *Phénoménologie en esquisses*, Grenoble: Milon.

Römpf, Georg, 1989, „Der Andere als Zukunft und Gegenwart“, in *Husserl Studies* 6, Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers S. 129-154.

Schütz, Alfred, 2004, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, hrsg. von M. Endreß und J. Renn, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.

Tengelyi, László, 1998, *Der Zwitterbegriff Lebensgeschichte*, München: Wilhelm Fink Verlag.

——2008, „L'impression originaire et le remplissement des protentions chez Husserl“, in *La conscience du temps*, J. Benoit (éd.), Paris: J. Vrin, pp. 29-44.

谷徹 一九九八『意識の自然』勁草書房。

——二〇一九『文明・文化と「数」』『文明と哲学』第一一号、日独文化研究所、みすず書房、七一—八六頁。

(本学非常勤講師・客員協力研究員)